

毎年二月下旬になると、大本山永平寺だいほんざんえいへいじや大本山總持寺そうじじをはじめ、各地の修行道場において、新しい修行僧しゅぎょうそうが道場の門をくぐります。

その修行僧のことを「雲水」ともいいます。「雲水」とは「行雲流水こううんりゅうすい」、すなわち雲が行き水が流れるように一か所にとどまらず、自らの師匠を求めて各地を托鉢たくはつし、修行をする僧侶のことです。

仏教を開かれたお釈迦さまは、お悟りの後さと のち、八十歳で亡くなるまでの四十五年間、インド各地を托鉢たくはつし、教えを説かれました。

また鎌倉時代、大本山永平寺を開かれた道元どうげんぜんじ禅師は、ご自分の師匠を求めて中国に留学し、正しい師匠となる如浄にょじょう禅師と出会いました。その教えを受け継ぎ、大本山總持寺を開かれた瑩山けいざん禅師は、各地にお寺を建て曹洞宗の教えが広まる基盤きばんを作られたのです。

現在、全国各地に約一万五千ヶ寺の曹洞宗そうとうしゅう寺院があります。各地のお寺で先祖の供養が行われ、多くの人々の信仰を集めています。

その礎いしずえとなるのが「雲水」です。修行道場では、修行と悟りさとが一つであるとす「修証一如しゅしょういちにょ」の坐禅を中心とした日々の修行の中で、僧侶を育成するのです。

新しく修行道場に入りこれから修行の日々を過ごす雲水は、様々なことを覚えていかなければなりません。

道元禅師は、坐禅はもとより、顔を洗う・食事をする・歯を磨く・お手洗いに入る・お風呂に入る・寝るといふ、日常の行いすべてを作法通りに行うことが修行であると説かれております。

修行道場に入るとき、先輩から教えて頂いた言葉があります。

「修行道場の空気を吸っていること自体が修行なのだよ」と。

その言葉を胸に秘めて向かった修行道場では、確かに凜りんと張りつめた空気と微かに漂ただようお香の香りで身の引き締まる思いがしました。

ある程度の期間を過ごし修行道場を去る時に、気がつきました。これで修行が終わりなのではない、ということに。その証拠に、修行道場を去ることを「修行終了」とはいいません。それは「乞暇こうか」、といい、たまたまお暇いとまを頂いて修行道場を出て各地

おもむ
へ 赴き、そこでまた修行の日々が始まるのです。そこが生まれ育った土地であるか
もしれませんし、そうでないかもしれません。

いずれにせよ、曹洞宗の僧侶は、いつ修行道場に戻っても良いように「日々これ雲
水」の気概をもって毎日を過ごしているのです。

— 終 —